

第38回日本皮膚悪性腫瘍学会 学術大会を終えて

六戸 大樹, 澤村 大輔
弘前大学大学院医学研究科皮膚科学講座

はじめに

2022年6月24・25日の2日間にわたり、第38回日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会を開催させていただきました。本学会の当科での主催は初めてのことであり、このような機会を与えてくださった日本皮膚悪性腫瘍学会関係者の皆様に感謝申し上げます。

ハイブリッド開催

学会の準備を開始した2021年の春は、新型コロナウイルス感染症第4波が全国に拡大し、緊急事態宣言も発令された最中だったこともあり、現地とオンラインによるハイブリッド開催とする方針といたしました。現地会場については地元の弘前文化センターが改修工事のため休館中であったこともあり、別の小規模会場での開催とせざるをえませんでした。現地会場の規模と新型コロナウイルス感染症流行の見通しも立たない状況であったことから、「オンライン参加推奨」とさせていただきました。学会事務局、配信業者、現地機材スタッフと打ち合わせを重ねて当日に臨んだのですが、残念ながら配信側の不手際のため配信トラブルが続いてしまい、オンライン参加の皆様にご迷惑をおかけする結果となってしまいました。代替措置といたしまして、指定講演、一般演題については、配信許可をいただけたものをオンデマンド配信させていただくことにいたしました。

特別講演

本学術大会では、特別講演として2名の先生にご登壇いただきました。特別講演1では、悪性リンパ腫の統合診断システム(READsystem)を設立された東北大学病院造血器病理学教授の一迫玲先生にご講演いただきました。診断に難渋しやすいリンパ腫の総合的な解析・診断をする本邦初のシステムを立ち上げられた経緯、今後の展望を具体的に解説いただき、大変参考になる内容でした。特別講演2では、「「はやぶさ」, 「はやぶさ2」が語る、時代をひらく新技術の立ち上げ方」と題し、JAXA名誉教授(現東北大学教授)の川口淳一郎先生にご講演いただきました。川口先生が弘前市のご出身であることから講演を打診したところ、快諾いただいたという経緯です。講演では、自分たちはできると信じ、「やれる理由」をみつけて挑戦することが、前人未到の偉業達成につながるという熱いメッセージをいただきました。

シンポジウム・教育講演

シンポジウムは、皮膚悪性腫瘍治療の重要なポジションを占める、皮膚外科に関するテーマとしました。おそらく多くの先生方が術式や術後管理などで悩むことが多いと思われる3つの部位(外陰部・肛門、頭部、手足)のそれぞれについて、エキスパートの先生方[須山孝雪先生(獨協医科大学埼玉医療センター)、浅越健治先生(岡山医療センター)、杉村友紀先生(浜松医科大学)]にコツとピットフォールを解説いただきました。具体的な症例を数多く



図 教室員とともに

提示いただき、まさに明日からの診療に役立つご講演を拝聴することができました。教育講演では、ウイルスによる皮膚発癌[永瀬浩太郎先生(佐賀大学)、清水晶先生(金沢医科大学)], 皮膚付属器悪性腫瘍の病理[安齋眞一先生(PCL Japan飯田橋 病理・細胞診センター)], ゲノム医療[角南久仁子先生(国立がんセンター中央病院)、藤村卓先生(東北大学)], ダーモスコピー診断[皆川茜先生(信州大学)、外川八英先生(千葉大学)]をテーマに各方面のご専門の先生方にご講演いただきました。ウイルス発癌における最新の研究データ、診断に迷いがちな付属器病理診断やダーモスコピー診断のポイントを解説いただきました。また、皮膚悪性腫瘍での癌ゲノムパネル検査の有用性を再確認することができました。

おわりに

本学術大会では残念ながらハイブリッド開催とせざるをえず、オンラインでご参加いただいた皆様にはご迷惑をおかけする結果となってしまいました。この場をお借りしてご参加の御礼を申し上げますとともに、配信トラブルについてお詫び申し上げます。学会運営をサポートしてくれた教室員(図)や同門会員の先生方、配信トラブル挽回のために尽力くださった山田紀子様はじめ日本皮膚科学会運営事務局の皆様、心より感謝申し上げます。また、ご賛助いただきました企業ならびに個人の皆様からのご高配に厚く御礼申し上げます。